



奥州後三年記

特別
イ 4
3163
205



奥列後三年記序

朝家小文氏此二道あらたぐひに政理成
て山門小顯密乃支宗らりてをけく護持
を致す是聖代明時の洪業を承りて神明
佛地此余化すありと云ふことなり
小牟朝祚武天皇五十六代清和天皇此清
子貞純親王六代此後胤伊豫守源朝義
朝臣乃嫡男隆奥守義家朝臣八幡原
と号す堀川院清宇永保三年に奥列
此任す是く寛平)みち乃くに奥六郡

を領せし鎮守府將軍法原武則が孫荒
河太郎武貞が子真衡が富有此奢るるの
仍詔より起りて一族ありて帝従とあり
りし秀武ありてみ武ありて合
戦をいひ其後其後及て法井小武
衡家衡をせめしきし小大軍ありしを
はくし勇士名残ありて我ひそのす
を去るべし同は大使軍陸奥守北氏徳威
熾上代ありて又稀なり取謂雪代中に人を
あつてむふ仁心を陽和志氣膚ふく

雲北外子雁を志ふ智畧ハ天性此才自
小蓄ふ武を士卒剛脆乃産をうりこと
をとり人をとげしありて出後没落
乃期掌をさしてあまはれり仍て寛
治五年十一月十日夜大敵をて小滅之し
て強黨とくくを殊ふ休むを後解状を
勅して奏聞歎感をたれし俗呼て
これを八幡殿の後三年北軍と稱す星
霜は月くありてあまはれどもは佳右
朽ふとれし源流廣く族して今小

いりて又亦新なり古来此美歎
其威徳を作がげん在上の志
ろ相ゆくす急ははる未さん事
後漢北二十八將を形を凌雲臺
本朝賢聖障子名士成紫宸殿
うふ故り今以該成潤をりし
なりこれ未由につまけ畫圖
南谷北房漢とて其功を誇り
論乃端とつふとかりれ兒童
をさくめく 續作北窓中
時と氣成

披く永日閑夜乃寐寔をあら
の里北外もをくこ道成りて
朔風晴月乃吟詠小まき
後五精微北はふき丹青乃
舟とゆり能筆紙少北姿金石
古も取くはは此尤ふ益あり
あしく感せざめや干時貞和
権大僧都去慧一谷北庇命
乃小序を記をといふと志り



奥州後三年記上

永保乃ころ奥六郡がうちには法系志士
といふものあり荒河右衛門武貞が子鎮
守府の軍武則が孫なり志士志士一家共
ゆき物羽ふ山小乃住人なり康平はら
りひ源頼義貞任宗任をうち一時武
則一万余人の惣隊具して河方よく
つれふまよるゝ負任宗任をうち
いげきりこれみりて武則が源
六郡乃まといきりそれよりさ記す

貞任宗任が先祖六郡地を以てあり
け家なりと云ふも威勢が父祖母をくれ
て國中に肩をあらぬと此形一
うふも一くもそひがこと成をそぬい
國宣ををのく一胡威をかきけかく
すあ流よりりて埒のちをさやふ
て兵ねさまきしをさひの子あきふよ
ア一海道小太郎成衡といふもの成子
とをり年いさむつて書たなりり
もまはあ衡成衡が書成りも

尚ふ乃うち此人のみを後者となすり
隣國よあま成りもむふ常陸あま
多氣槍守宗基といふ猛者ありそのむ
たあをのけりけあ胡長此をを
め形とりり程あむり一貞任をうん
とそみちれあくをうり一時娘のり
成れうちあまはあひてむりすをた
ちと一めそ女子一人をうめり祖父宗基
あま成り一はきあ一あ小事う成り
形一まひり一此女成むうて成衡が書

とすあ〜〜〜きよめ誠郷養せん〜
為四隣國乃そとなく北岸木どと日ど
小事をせさうん陸奥のあ〜ひ地火種
いひてとなんいあありり〜
くひ物成あひむふ乃〜ふ何〜ず金
銀絹布馬鞍をりちたこぶ物お玉此
何人吉彦秀武もいよ者ありこれ
武則が〜のをい又むとなり昔
頼義貞任をせめ〜付武則一家をぬ
あひて為國(越来て素永郡磐井の島)

あ〜法陣北押領使をい〜めて軍
を〜乃〜一付あれ秀武三陣の攻
け〜めあり一人あり志〜心を去
が威遠父祖ますぐきて一家北も〜
れほ〜後者とあれり秀武れあり
家人の〜ちふりよかされてあれ事
を〜れむきぬ〜れ〜色あ〜中
小朱北盤小金城〜い〜く流〜目
上丹才つ〜さ〜けて癒了あゆみい
た赤癒了〜さ〜ははきて盤を取乃〜小

はるきくわう系を志徹市持信よそ又
あうれきうみといひけふ奈良法原と聞
基成らちりりて所 せきくあり
て秀氏老れちりりし腹く系くあり
なりてゆみありしやういれまきし
き一家北老あり果報乃勝者よし
て自後乃あまひをんきくむらに
を北身をわめそ 庭よいさぬつきま
ふ成又く見い道ぬあさけあく
屋をくぬしぬりとなりひて金を

大勝るなすけちりりそあをうたき
ちちりりそ門乃あつた物くうこ
はくりちきりり飲酒成るぬ埃者
少のにらきく長樵あよをかとれ
まきりりちをそきせぬがとりてき
あ即おとよ

んぬ物れき

せき勢かて

ゆ羽あ(あけく

志衡周基うちをてて秀武を孝と
ぬふかしくしてあんはうりぬと
つて成すて志衡は内子にいらりて
孝うちを此に法郡北兵成信一て秀
武をせあんとき兵雲雲北あとき集
日來をさるふ月出さかりつて六郡
あちまち母はとき此に志衡す
てに此に四人は白ぬ家ふ秀武あし
これに勝こよれくをとりさるせ
おとさるんと能成あうと次とあひ

て支夜をせめらうと次やみち乃あ
法衡家衡といありの何り法衡は
此に持た吏経法の子なり 経法貞恒は
おと一してささふし後武則が太師武
貞恒法を書きよひて家衡をいふは
あちかちを忘りれた法むと家初
とハ父うをりて母いと乃兄才あり
秀武あ二人がりと使成をせとい
をらああう志衡にうく後者此と
てあ家あれと孝うちを能成うとす

杉原さまとや思ひさま外此こいつと
てせの城めついで既に我りともあす
分也そ乃あたらりとあちいつりつり
てかの妻子供とり家をやきとついで
路くさそ志の衝をやう屋くついであくへき
たり持乃ひま城ととめんよは時を天
道北何と之路の時あり志の衝妻子を
られ領宅をやきとついでいまぬとき
る道者此首城志の衝ふえつ水ん事
さつと愛母あつんとついでとくま

あり清洲家衝よりいひをかして
其の城れとついで志の衝つをちつをそひ
ゆくみちあつて伊次乃郡自身乃村の
在家に百余家をうめく焼つとついで
ついで志の衝つとついでたつとついで
まのきよひつとついで家つとついで
とついでつとついでつとついで家つとついで
つとついでつとついで

つとついでつとついで

つとついで

内証ひしあふれうかひを志えんし
ていよくいりてあはれうきひて無残
集くわう本末をとりこめ又秀武のり
厚とゆりんとていさあちするあ
けうりあし永保三年の秋原義家
朝長隆興とあなりてあそつたに
まうあひしうまのきくひのこと
わきまれく新司を郷食應とんことを
いせあむ三日厨といふ事何り日こ
とに上馬あ十足たうん川もあき不

金羽あきしし 緋布のあきひ敷
しひりてまといまうり吉衡 厨司を
郷食應しとてとりて奥一のあるし
あはれ本末をとりけんをありし秀
武をせめんとすいさあはれはうち
わが鍛錬しあて

我身きき紀の

しきあひあ

ゆき
むらひぬ

真働お羽(越)あらうし一越まうして
まよおの家ひし又さる乃あわく
をうひきくをてまひしつ越越
きむを付國司北郎等小冬何ふ乃
任人兵者大吏正経伴次郎兼仗助兼
とふ者ありむことあうとにてあひ
自一てあ北郡の檢問を一てさぬ
ひしをち地く何りげら越ま
衛り書はうひを御りていあうさ
初秀武うとと人ゆ丈む之家あひ

あに清の一家ををひまうして
をくかお志う何まこと兵たぬくありあ
あを現しうあまをうれあした
女人の身大お軍たひり此ふあ次
まうし路ひ大お軍としてう
たひひれありさぬを國司まやさ
厚きし一越いひやまうし西経助兼等
これをまうし事とつ次さ初ひうたち
へまありぬ清初家ひし路ま
アすそにきしう

○武ひつゝ四司返久きれふけりとき
てみち北宗より辨試ありあひておね
（おえく家形）りりきたきりりて
しやうきみ独身此人よそかえりり乃
ん試りておね一日といふとをいひ之
しきりといふ名をあく御事一人
乃言名りあつておねはこれ武
ひつゝ面目なりと北こくし北
むし北源氏平氏おねありあつて家を
おくをいひし終りあつてすておねかきり

小阿のいまおをいひては
目しゆを屍をいひすしとて家衡
こま試りけしあつてりりな
節等とのいさふあつてあけりり
いしゆを倉澤乃柵といふありそれハ
あつてりりあつてりりありといひ
あ二人お具し

沼柵をいひ

かたさつたふ

うけりぬ

文前
後相

脱文
有之

お軍の令牙兵衛尉義光あつてさなり
陣ふまきりお軍ふむひいていそくふれ
う丹我のふし試さきふもりて。義家夷は
せあつれうらあまくゆるしけふぬを
おれいとまをたまわんと。院うのまを
ゆるし。ゆるりりりりあんゆふといふ義
家これをさきそころこひ乃海試をさて
いそく今日此足下乃来りたまふふ
故入たれ生うりてわをいあつとこり
おるゆるし

●義家夷はせあつてゆるしけふぬを
多のいそくをさて死をえらふといふ上をいそ
ふをゆるし。あは兵衛尉と辞申て。

君すくふ副^{きひの}お軍とたり結り武初
家ひくくをえんるをぬらり
ありやい前陣の軍すくにせあより
てあつて小城中よむい振く矢乃ち
るゆれこいお軍乃はももの底を
くぬふりれをかけし。相摸乃ゆれ
任人強倉の槍ふ節系正といふ者あり
先祖よるゆえ多りきばえとのちり
年己川ふ十六采ふて大軍れあ
わつて命試をさあつて同は征矢を

右北目次射させの首を射はるぬきま
ゆふとの神射北極不射はるぬきまあり
うけて高の矢射射て歌を射とらひさそ
乃ちあうそ死なうとふとをぬきま系
正子願うととそ乃けさぬまぬぬ
此ははるこの三浦北平左郎好次と
このありととそゆえあうそ者ありけ
ぬきま射さるぬきま系正の歌をぬきま
矢をぬきまとら系正ふあり刀をぬ
きまぬ次うきまをうとてあけさぬ

母はうんとはぬ次たたらさるこふ
おとかくいさるそとら系正のあり
弓箭ふはうりて死すはる法をぬきま
乃そむとらありいうそ生れうとら
てけをぬきまうとらあはるぬきま
ゆふの射さるてこれ家と死あんと
ぬ次吉次まきそゆふ射勝をぬき
射をぬきまうと矢をぬきま射はる
を見ま系正のありぬきま
ぬきま

ちうをばくしてせめたるふとんと
と城おりのまきうかー岸あうくーと
壁此をよとてはうととー遠きとの城ハ
夫成りのてこれを射迫きとの城も石
らをもはしそをうの死す忠と此教
をよ〜此伴次郎備仗助兼といふ者あり
きもあははしむれありはゆゑ軍此
先よとのお軍これをとん〜と居合と
いふ程をあんさうけりけり居あうくせ
めよ衆あうりも教を石ら城をい〜け

あうりもはよとてふ何うりあんと
うりけを首成ありて男をきとん
めう中けとばふととをうちおと
されああり甲札ちんは時本をきれ
小せりのあふと若屋うてう七にけり居
金乃甲ハけと記うせあり助兼ふのく
いふみと〜とせり玉司武衛あひらそ
アとぬとまうくいよ〜いふ事うきり
た〜國此路ををめてひと〜みつと
との城とれよ春友化事あくお立〜

て秋九月日數万騎乃營をひきぬく
令沃北詰へ趣きすくふ也三日大三太史
光任年八十ふく相具せんく四
府よとる家腰ハあくみくお軍此
るの纏よとらはずて後をのこひりや
く奉れふといふりるをくくく
お生ぬく今日我君取作一騎をんを
足新まき事よといひれをさく人
みおあを連り

泣り

を判

お軍此いしをさくお令沃乃柵小いり
はまぬ雲を流れとくして野山城く
せり一乃斜厚雲とをくう家あり
厚陣あちま比小向のまくう方り
ちりてとふお軍さうりふく連城く
何やーとおとろきて兵城く野色
をぬきーむあん乃く草むく此中よ
ア三十余隊の陣をもとの城あつひえ
利こ道かくしをけふなりおぐん此法
たり此これを射ある戦城くー

於てまゝぬ義家此邦先年宇治及び
 系一て貞任をせめんとすあとのやけふ
 を江州匡房卿あちつて美濃ハハハ
 武士此合戦乃道城あつぬと初より
 ぢらぬ^ハ系をす一 家々席ホつてワガ
 主なり此兵をげやき見するいあたまれ
 うあとのいひいり一 家々けしを
 かうふ義家こ運成ゆり一 系事も
 何とんとそ江州此あつまけつと
 ろり一とつと一 會ス一 一

その後彼卿はあひて文成のみをり
 一 家此れ文此乃成のつとん兵
 安ろつて武ひつが

きあゝあゝあゝあゝ
 かなぬ一ゆり

いひをれ

兵野り 伏付

雁付一城

あつと一 一

ゆりつと一

柵をせじふ事教日ふとよふとつくと
といまうたつと元氏お軍ほそとのと
も乃ん張をけまさんとも日とくに剛
臆此度状あんさこめける日よとりて
剛ふんゆ家者ともと一症よまらん臆病
ふゆゆとの張一症ふまらんをの
臆病此症みはうととけり毎かか
とつとと日とくに剛此症ははく者
かつらをり腰籠口秀方あんな度も臆
の症よつとさりけりこくとこれをふめ

かんせんとつとつと一季光ハ義光り
部ホありお軍此部ホとの中にと友
跡子臆病なりとときこゆふとれまらん
お人ありをりあま状畧頌まけつとを
て猶此者まうととて耳をぬさく剛乃
との紀七高七文藤王腰籠口末四部
いあ者末割惟弘事たり

奥列後三年記中

吉良秀武お軍丹下城の中
く海りりて津方乃軍立てふあ
ゆきけりそとなく此ちうを
ととなくあつまう一あつ
とめてそを海きそまの
糧食はきあそはしめを
おちなんといふ軍
をりてあてはす二方
はく一方若義光これ
をすく一とくハ

衡重宗こまをましくかくて日教を
かたどくに武衡ももくに龜次並次と云二
人の打手ありなすひあきけたるも此な
巴ををあえうちと名付しつり武衡使を
將軍北陣つらひて消息しそいもた
うひのめしきそ流をうきりかき龜次と
云こえうちあんゆらめして西流を
そぬしよりと志る海（支撃）の一人出
てめしあそやあうひし流ををあくはめ
ら道徳うきさうといひをきり

將軍出まき討て戦もむあり
次任り令人鬼武とりよとれありん
多げくすれちうちゆりありあ
これをえらひてしす龜次城乃井
しりををくす海二人闘の庭みしりあ
てあ方乃軍目ときかきあま戦る
あすすてたもをのひてしり河しす
時ありあうひしはせまありと
みくあきふりふ龜次長刀此き記志
きりあうかやふしゆはしよ龜次

甲曹さかろく鬼武々な手あるは死
りかろりておちぬ將軍此いくさより
こゑ乃時成法なり乃一は知す天
初かきさるは城申ははる
この島は首をさるれ一とちより
くのをみさをあへてけお軍乃
はよりれ又島はがらひをさるんとお
那くくけ合ぬ又あ方さるれ一
アと大さな海か將軍の法をこれ
教多して城よりちをさるれつをも

乃おとくくちとさぬ未割四郎
こ建弘をく病此畧頭は入る事なをぬ
くくちとく一して今日我剛臆をけ
まふ一といひて飯さけおぬくを
ひてかことさるれまにさる城うは間
小く矢頭乃骨はあつて死す
村きさるる頭のみりめより喰ふ
ふ飯さるこはかろく一とちより出
うりんはこれ慚愧をたといふな
一お軍あき成までかろく一とちより

くりしをきりしと残しにあきる
人一旦をけえてきんをうくはかあ
を死ぬあさうかくれとーくうふと
うら乃とれとー

入さし〜喉り
と海乾

臆病の

ゆたなうとそ

いひける

家元〜乳母千代とつあその屋々
乃上〜ま〜勢をたれち〜お軍
いあ〜あんち〜父頼義貞伯家臣をう
ちえ〜い〜名簿をき〜けて故清將
軍せり〜い〜あてまつりひ〜人あそ
れち〜う〜あてき〜は〜貞伯残ち
え〜うり恩誠少あひ誣をい〜死あ
いほ〜乃母り〜む〜い〜毎てまの
あき〜志のる誠海を〜に相傳れ家人
と〜て〜い〜をぬ〜き恩の君残せ

めたてまらふ不忠不義乃ばはるはにめ
て天道の女めをくめくんとくふれは
くればたそのをれくくちさる
とときてさく危んとにふをお軍制
してそのいとせすおらん乃いふ
そ一千印城を捕まへんそのあ
らたうきりためなりい乃ちをさるん
奉ちりりたくたよる

かろくろんぞ
いんり

彼れうち食つて男女死れあけ
く終くむ武のくす光ふはきて降
やふよー光れす一城お果ふり
お軍あらくゆ家さるあけひくた
神んらあたそ祭をもちてよー光を
うらひていそく我君かこしけ
城乃中へさめりたまへる此濟供
まつりあえはりともそるうり
いふ光ゆく海きよー城いよと
お軍よー光をよひていふ昔より

今ふいふふまて大将功將の敵りしを
きて敵へ拵くゆいしまじしゆいよま
あるゆたり君りし武ひし家初る母
とりこめられあは我百段千段
くふとも何乃かひり何んれしを
を百代の遠よれこしあさきりなる里
の外ふまのゆんといひては説をちし
ひるゆかきりかしこれふあけり
ゆん武ひしかきりてゆい光り
いしゆし津身につり給あるゆい入

のしに者あはるゆき津はるい一人
を拵くねりゆ事よしくゆい
ゆんとよゆし光らるゆいその中
ふ誰りゆんすふとちるゆいれ季
方こそ海るゆいゆいゆいゆい
季りて敵ゆい何ゆい

ゆいあゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

城戸をいひてひき来て見ゆ
人ひらりといひて城中ははたさの如き
乃こそくろしたち並ら箭右刀かき
林はあそくちげくして乃城をさり
季方よりうに力をそとて河
入家の中よのありておぬ武ひくか合
てりくくよりさふ季うさちりく長
よりてあり家並くかくして出を武
術あ残まけそあまけさ世路くと兵
張及よ中さくまは残いしあり合

おるくともさしそとて季うさちり
城中ははたさ今日路をく次とと殿
原あち路ひあえさねく物そり
河んを流といひくともす武ひく
ちより大あふ矢城とりつてあまは
人乃矢まそゆるふりは矢はあまは
く解くはあさ家射くはく色の皆あ
なんといふと急る見そいさく是あ
をのまき矢ありといふ又立とて云
と一我を志ちあそんとれかさた

今書きてありしにふと一婦人あり
おん母をこもればとめお中よそと
かくもせしむんいきためてはろく侍り
おんとつあ武ひくういふやう大くこも人
きよにたあしとあもくく海路ふと
あくく中経ときて御り川季方さだの
こくに兵れ中残りけてる時た刀れつ
りふと残りけとち日^あひ^いて少も氣あ
かえりしうのゆたうてあゆもるや季方
母れおんはよろほよくれありけり

城をまぬく秋より冬よをよひぬ又
さしくばあしくなりてはれこへあ
そのくうねしみていふやう去年乃
こく心大者ふん事まてよ今日
ゆめ此事あり雪あひあえ^後死
あんまうこいあくくに妻子ととみ
な國府ふありをのくいそり京への
あふ危きといひて泣く毎とと書
てくれ者一ちやう者ふを母とて死
なんとははをうをて糧料と一して

いづれも一して京へ上り上へ一と云
て我まゝふまむせかゝるをぬ素女なり
とも城に府へ居る城中 飢民のそこ
て先下^先女小亭部かと城戸をひら
きて出^出来ふ軍とともみれ乃城あけ
てこと城通一やふは城アんとあ
らして又おほくむらうらうるを^秀清
武お軍ふりやうにれらるる乃け
て女をアに類城まうんといふお
軍をこれれをともふ^秀急武いふやう目れ

前よりこゝろきあしをんを此ら家^家の
執人きこめて降らし志うは城中
の糧疾く尽きありすて小亭此期子
なりあふりせうれひをせられし
す^斤時ありとことくおちあん事^城
初よけらるる乃推女童アハ城中此
はたとれしものも妻^妻也子ととなり
城中ふをうたをいとい^いは
妻子丹物^丹をせぬるあま^あま
く一時り^一るを餓死あんと志うは

城に比糧令をこしとく尽し厚きあり
といふ將軍は残すてを去り候へり
といひく降る所乃や川とと足船目の
前よりあるをこれとんて永く城戸と
とらてかきひてくつれ者なり

奥州後三年記下

友東北資道忠於軍北赤とに才志ト
き郎等たり年己のうふ十三所ト
て於らん乃陣才よりりよふおふ身
をとも形を事取し取すをうりみ
おらん資みち城木こしやよおる
武ひの家おふよあこいこあへり
さへあふ軍とととのくまへり
町の南とと小火城つけてもをあふ
危しといふ資みちをいしとまひす

人あやしく思ふともお軍共をまづの
まにうり屋より火を付けてをれ
くは成あふ成りほこみろれあふ
まあんねちもり人をも非ありとか
ろりすそにまをれらるひよあふと
いと天道將軍乃

心さう一残をまけ

終い々たりや音

あふくあふ

武ひし家御食物とくくはきあ
寛治六年十一月十四日此夜法井
前をちりぬ城斗乃家ともみあ火をつ
き川畑の中小をの記のーは事地獄
乃とーに方よみくして蜘蛛共子成ち
無二行とありしうけて味のー少急殺も又城中へ入て
らゆ子似る將軍共殺をふく侍者若子
方一人あり武衛ふけて城乃うちふ池
共ありけあふ死入く水ふ志のふてり
ろ成兼ふくくをふはんとものとも
入るれてこ成成りともはあふえつけ

て池よりいせいでいけとるらい又
千代おれしく生虜ませしれぬ家徳ハ
花井子といふ馬をかん持りけり六郡
才乃るありこま成をまはるる妻おに
とるるりふせんをけり敵のとりて
乃るる海にいどいいてはかき付
てらるる村をりいさそあや
れけとるまの成にて

あつとく
ふきのいこせり

城申れ美女とほはとれあつとくいれ
て陣乃ちちへおて来侍ととれ首かき
を洋にまされて先子ゆく女はなみ
をありてあつとくたぢくお軍武ひ
をぬし物くいり責ていさそ軍
れた舞成りて敵をうりむり
いまもゆき海をなすいあり武則
且六官符れ有る海を七か將軍れ
かつとくいふりて清方あまのりかま
り先子成先日傑辰千代姑ふとて

名符あるより一甲一者くさん此名符
さういふてあんち借入あつあつんをさや
ふとやと出丁一武則えいひを此いし
き名符ありくさ一きれく録守
府將軍乃名符けつせりこれ將軍此
甲をこあそいしよりなり是すそ
小功骨をむらあみ何さやいんやを
むら一者そ身よいさうのあうら
照くしてむあんと事とん何りり
よりてういさうれあをけさうふあ(さ)

志う名符さうりう一くを思乃乃ま
とあれり甲そのふめゆた一ふこま
ま一甲せとせむ武潮ハかう急を地
はきり教て目録りさけをたのく
多一日北い乃ちをさうあ一と云備仗大
完光房子あ月せてろ此頭を斬し
む武潮いそきうんとすあ時子義光小
目録んあをせて無備政をすけ

さやほく
とふ

家より先お軍小いさくばるとはた
降人成あしむるは古方此例なり忘ら
ふ成武初一人あをうちみ頭をまうは
ねるを此ふいりといふ一あし
先小成を忘りけていふや降
人といふ者我乃場をのりて人れ
はかいらんて後小成試くいと首成
乃成てまいふあり 取渭宗任等なり
武衛のあしむるは北場小いけとら
まをみりりく斤村のいり成

たむつきをは降人といふ人や
君志乃礼法を忘るは成りしは
しといひくけなり斬つ次は千徳丸
をめし出して先日矢倉れよふといひ
し半あいまやとんやといふ千徳丸
成を忘れてといひを成りしを
成りしと河原直といふものあり
あては成持く成成川いさんと
將軍大さ小いりといふく虎北口
をいふんとすたなりをあらうと

て退走あやほとこれにてまゝくえ
いより令ち〜をとりいして古戦とま
まんととゆみ子任齒をいひあそむ
何りすかあま〜して齒をゆき居あり
てり此古戦川い〜して是戦斬つて千
但る舌をまき〜をとりて志もり〜めて
本の枝は流りあけ〜是戦地みはけ
あ〜して是乃下小民働う首戦を有利
千但なく〜何〜戦〜あて是をぬま
す志〜〜ありてち〜〜して是とまけ

て此井ふる此首戦少〜の將軍これを
〜ら〜と〜にりあ〜二年乃
慈眉もふは〜ふひ〜けぬ但な戦〜
む家と〜ら〜家初〜ら首戦ん〜事
せ〜城申此宅とと

一州あやをあらひぬ戦場

城乃中り〜

人馬席戦

みいせふり

こと〜

縣小次郎次任といふことのあり、尚ある名
せはるるけんと此あり城申此者のおを
きむと此は道を志きりてをくのみを
成りしあり、戦場をいけてのり、
みれ次郎おえられぬ中、家ひのあや
し、此け出のまの、
多を次任これを見て打とらして、
い、
軍、
自れを并れきぬとりて次任より、

又上馬正又籍をきそてひく家ひの首も
てまの、
きに多れりてまいふ、
次郎、
い、
ら仕ぬる、
衛家、
と、
前、

將軍四解をきて、武衛家衛の謀
及ぶに、身任宗任は、さうり、さうり、此
力をとめて、多海く、ちきひく、家
を、得、り、た、を、く、追討の官府を、あま、り、り
て、首、伐、を、き、て、ま、つ、と、中、を、ゆ、れ、も、
さ、さ、く、此、敵、さ、る、さ、さ、く、官、符、を、給、り、
た、勅、賞、を、これ、い、家、一、似、て、官、符、を、給、り、
く、い、家、さ、さ、く、さ、さ、く、ま、り、ぬ、と、さ、ま、て、首、を、た
ふ、捨、て、む、さ、く、さ、く、の、り、り、あ、さ、り、

明和七年庚寅春三月廿六日写之

東都 扈從隊士 伊勢平藏貞丈

印

印

奥列後三年記乃後り録す

一 東鑑子云兼元四年庚午十一月廿三日丁未奥列十二年合戦終自京都被召下之今日御覽仲業依作讀申其詞云是謙倉將軍實朝公乃代也是と云考まると奥列十二年合戦物語を謙倉將軍時代と云と物前乃代と云と云一書也前九年の物語は陸奥話記あり一後三年の物語は即此書なり

一 右實朝公乃時の後三年合戦乃繪今も二卷傳まり其繪は飛彈と惟久の画也其詞は上卷土御門文及家人仲在書之、中卷持明院左少將保脩書之、下卷世尊寺塔三位行忠書之、其真本今も傳まり林道春云備史君宰相忠雄卿乃家も亦存也云々其他傳写乃本も亦世も亦存の人間も亦存也云々

一 此本も貞和三年玄惠法師の序あり序は益富东塔南谷の穴強として其功を歎ふとありを足すそのの兼元四年乃古畫を貞和三年小彰も亦一と山門も亦ありれ一也予彰本も亦玄惠序ありれ一也貞和三年

八巻兼元四年より百三十八年乃後なり

一 今世より傳る所の兼元四年乃本上中下三卷ありこれ上卷乃爰路乃初武ひくハ四日迄久まればけりとききてと云ふより書初めと抄まより前の文なり一終も亦あり一是を思ふは昔ハ四卷より一初の一巻ハ一初一初なり

一 け貞和乃本と兼元乃本と校合ある小貞和乃本脱文誤字あり今兼を以て本文乃傍にこれを記しはく
平貞丈識 印

右貞元以後三年記者依懇望更乞需之以伊勢氏貞丈之藏本書寫之是全上古之奇書也
可為珍重莫何不少哉

明和八年卯年秋九月十九日多賀宮中原常政誌之



寛政二年二月五日申之下刻寫

~~終~~

終



